1999年

緑区民の

戦時体験記録集

（第六集）

発刊のことば

太平洋戦争の敗戦から55年目の夏がやって来ました。

戦争中幼かった子どもたちもはや還暦、戦時体験も半世紀以上過ぎ、その悲しみや苦しみの記憶も遠くなりつつあります。

日本の国は戦争に負けたことで、直接他の国とは戦争をしない国になりました。これはほんとうに有り難いことです。

しかし、この地球上では、第二次世界大戦以後も常に戦火が絶えず、現在でも「正義の戦い？」と稱して、ユーゴでは戦争中です。その為、この戦争により住んでいた土地を追われ、家を失った人たちが何十万人もいます。

いつの世でも戦争を始めるのは、自分は安全な場所にいて戦争被害に遭うことのない、地位の高い人たちばかりです。戦争の犠牲になるのは若い人、女性、子どもたちと決まっています。不条理としか言い様がありません。

私たち日本人にとっては、この半世紀の間に平和であることが、当たり前の事になってしまい、戦争がどんなに悲惨なものかを忘れかけています。

戦争によって誰がどの様に悲しい目に遭うかを、この「戦時体験記録集」を読んで知ってほしいのです。

目　　次

発刊のことば

養蚕業の家で …… 石河孝益　1頁

戦争が引き起こした物資不足～我が家の自給自足～ …… 伊藤勝見　2頁

Ｂ２９による爆撃 …… 大村達雄　5頁

敗　戦 …… 川部茂子　7頁

母 …… 鬼頭清花　9頁

私の終戦 …… 柴田釼三　11頁

学童疎開 …… 玉岡忠子　12頁

幻の友 …… 中川美智子　14頁

戦中の青春 …… 二階堂美智代　16頁

戦時体験記録 …… 林敏之　18頁

米軍５８機動部隊来襲 …… 平野善次郎　20頁

思い出すままの誌 …… 藤島繁博　21頁

子供の遊びと物作りの楽しさ …… 舟岡邦雄　23頁

戦争中の思い出 …… 古沢貢　25頁

戦争体験の歌《ごめんなさいお母さん》 …… 26頁

編集後記

（五十音順）

正　誤　表

		誤		正
３Ｐ	７行目	通称むきご飯	⇨	通称むぎご飯
４Ｐ	１３行目	苦労は創造	⇨	苦労は想像
８Ｐ	１行目	相言葉に	⇨	合言葉に
８Ｐ	９行目	看護婦員と雑務	⇨	看護婦と雑務員
１６Ｐ	１７行目	飛行機を制作	⇨	飛行機を製作
１７Ｐ	３行目	「リンゴ」の唄	⇨	「リンゴの唄」

『養蚕業の家で』

石河孝益（たかえ）

昭和14年６月、父病没する。８人兄弟の末っ子の私が６カ月の時である。十数人の使用人がいて手広く養蚕業を営んでいた。昭和16年、第二次大戦で３人の兄たちが順次出征する中、もの心ついた時には、桑畑も蚕室も十分の一程に縮少して母が一人で継いだ。蚕は、五月の春蚕（はるご）と９月の秋蚕（あきご）がある。５月の早朝、鈴鹿の里は遅霜を時には被る。幼い私が起きると必ず、母は蚕室で桑の葉を刻んでいた。まだ５㎜程の黒い幼虫には、室温の管理と桑の与え方、糞尿の始末も回数が多い。何千匹もの蚕が、一斉に桑を食べ始めるとざわざわと静かな快音が室内を満たす。煉炭や木炭の囲炉裏式暖房のあるこの部屋は、少々異臭もあるが暖かくて好きだった。

姉たちが登校した昼間は、葉摘みに同行し桑畑にいた。大きい桑葉は手頃なお皿になりナズナやハコベ花が御馳走にママ事遊びをしていた。時折、同年のＧ君と畑中をかけ廻り疲れると桑の実を採って食べた。彼も母子家庭の末っ子で隣の畑に母親と来ていたのである。紫色の実の汁で袋代りに使った白い帽子がピンクに染まっている。帰宅するなり米糠で洗ったが白くならない。そっと裏庭の柿の木に干すものの見つけられ、よく叱られた。

桑の木は秋蚕が終わると一株に２～３本残して剪定される。切られた枝は子どもたちが皮むきをするため家の一角に山積みされた。はぎとった皮は湿っぽいため数日、陽干しにすると学校で集め供出したのである。四日市の紡績工場で繊維化し、南京袋状のごわごわした布となり、主に夏用の紳士服になったようだ。繭は組合が買ってくれたが50円ほどだったらしい。母には唯一の現金収入だったに違いない。繭掻きするとできる真綿は、幼児や老人のデンチ（ベスト）に使われた。普通の綿入れのものと違って、軽くて格別の暖味がある。当地では、30年前まで副業として続いていたが、桑畑も宅地化や、新設の校庭にもなった。

戦前戦後の数十年、母が身を粉にして働いた蚕室は畳敷きの離れ居室になっている。母が逝って10年。乙子（おとご）の私も還暦を迎えた。

『 戦争が引き起こした物資不足 』

～ 我が家の自給自足 ～

伊藤勝見

終戦は小学校２年生の時迎え、我が家は農家だった為、主食の麦、野菜などは満足とはいかなくても田畑で耕作していたので食べる事はできた。しかしコメは水田の状態（土壌の環境不備）がわるく、予定した収穫もなく、さらに供出が厳しく、手元に残るコメは生産者の我が家でも不足がちであった。調味料の砂糖、味噌、醤油、酢など、お店に置いていないもの（配給制）はほとんど皆無にちかい毎日だった。そのためどの家でも家族総出で畑では野菜、水田ではコメ、麦、菜種を収穫し併せてあぜみちに生えている雑草とあらゆるものを食材、生活用品として活用していた。また、犬、牛といった動物たちも貴重な労力で欠かせない存在だった。

当時は、国全体が衣食住に恵まれず、都会の人たちは衣服、貴金属などを持って野菜、コメなどと物々交換をしに農家を尋ねてくる姿をよく見かけた。なかにはせっかく手にした品物を取締の警察官の尋問に会いすべてを没収された人が大勢いたと耳にした。

反面、我が家では肥料が入手できず、非農家の糞尿を米とか野菜を持参して汲み取りをさせて貰い肥料の代用としていた。小学校２年生だった私はよく汲み取りの手伝いをした。

何時の世でも言える事だが立場が変わると態度が逆転して、不注意で付近を汚して、相手の方にひどく叱責されたことが何回かあったと記憶している。

同じ民族でありながら衣食住のどれかが一つでも欠如していると、人は落着きがなく関係のない人にまで八つ当たりするものとそのとき感じた。今思えば誰もが好きでイライラしていた訳ではないが、当時は相手の気持ちになって対応できる状態でなかったのも事実であった。

古来より我が国では農耕に携わるひとが五穀豊穣を神前などに祈願してきた。その五穀とは「コメ、麦、あわ、きび、まめ」といわれている。我が家でも、田畑で野菜などを生産し自宅の屋敷には〔牛、鶏、うさぎ、犬〕などの動物も飼って、自給自足をしていた。

当時を思い出しながら整理してみた。

※『衣・食・住・動物』

衣
- 藁（ワラ）→藁を柔らかくして、わらじ、布団の芯、もみ殻で枕にした。魚籠（ビク、物をかついで運ぶ袋）、俵（コメを入れる袋）、叺（カマス、麦、肥料など入れる袋）など。
- 草（ヨシ）→夏など農耕作業のとき背中に乗せ日除けとして利用した。
- 古着 →古くなった衣類を足袋とかモンペなどに再生して利用した。
- 繭（マユ）→蚕（カイコ）がつくった繊維で、繭糸（ケンシ）、絹糸（蚕糸）にする。
- 綿花（メンカ）→綿花の芯を取り、綿（ワタ）を細く糸にして機織り（ハタオリ）で加工して、もめんのきもの、胴着（ドウギ）など子ども服など作成した。

食
- 砂糖 →砂糖きびをローラーで絞り汁を一晩よく煮詰めて黒砂糖にして調味料の代用としていた。
- 味噌 →大豆を専門店に持参して味噌と交換する。
- 菜種油 →菜の花の実を乾燥させ専門店にて油と交換する。
- 小麦 →実を粉にしてお好み焼きとした。またパン、うどんは実のまま専門店に持参して交換する。
- 大麦 →通称むきご飯、石臼（イシウス）で挽きこうせんにした（片栗粉に類似）
- 黍（キビ）→実をもち米と混ぜ合わせ、きび餅にした。粉はダンゴにしてよく食用した。
- 粟（アワ）→実を粉にしダンゴとしておやつの代用にしていた。
- 大豆 →豆腐、あげなどおなじみ深い素材である。
- 蓬（ヨモギ）→葉を粉末にしてよもぎ餅にしたり天ぷらにした。
- 桑の実 →紫色の実が熟したら甘味がでてくるのを取り食べていた。
- 柿 →酢の入った壺にしぶ柿を入れ実が柔らかくなると甘い柿になる。保存用として〔しぶ柿〕の木を植えた。
- 大根 →漬物、切り干し大根など今でも料理の主役である。
- みょうが →実はすしの具、葉は饅頭を包む素材として利用していた。

住
- 藁（ワラ）→風除けの囲い、ご飯を炊く燃料、筵（ムシロ）など
- 大豆の木 →燃料（火力が強いので）
- 小麦（カヤ）→屋根葺き（補修用などにも）
- 蓬（ヨモギ）→蓬を乾燥させ、煙で蚊取り線香の代用としていた。
- 竹 →縁台（エンダイ）すずみ台、垣根としても重宝されていた。

動物
- うま →輸送、農耕、肥料（糞）
- うし →輸送、農耕、牛乳、肥料（糞）
- 犬 →輸送用として

労働力として重要な役割を果たしてくれた。

- やぎ →乳、肥料（糞）
- 鶏 →卵、食用、衣料、肥料（糞）

食用として欠かすことのできないものだった。

- うさぎ →食用、皮再生、肥料（糞）

肥料が欠乏していたので少しだったが助かった。

※『 100%無駄なく活用できた素材一例』

◆稲 「籾（モミ、稲の実）→籾がら→糠（ヌカ、米殻のうすかわ）→藁（ワラ）と全てが生活に欠かすことのできない貴重な素材であった。」

◆野菜 「大根、人参など漬物、煮物などに、また葉は漬物の具として塩、唐辛子、ヌカなどと一緒につけ込んだ」

◆竹　「盃、箸、竹細工（竹トンボ、凧、水鉄砲）、箒（ホウキ）など色々なものに利用できた。」
◆小麦　「かやは屋根葺き用に、実は粉にすることで使用範囲が広がった。」
◆桑の木　「蚕の餌（葉を与える）残葉は肥料、木は家具の素材、皮は編んで衣服にした」
◆里芋　「赤日の茎は乾燥させ、寿司の具、煮物は産後の方に食べさせていた。」
◆その他　～まだ沢山の素材が 100%無駄なく利用できた～

※『まとめ』

当時の生活は無駄のない素材ばかりで、公害とかゴミ問題は皆無の状態だった。

子どもたちの家事手伝いは指示を受けなくても、毎日の作業範囲が決められていて自発的に行っていた。また、仕事の合間に友達と自家製ソフトボールでよく遊んだ。竹バットで10～20球くらい打つと糸が切れ球の原形が無くなっていた。

我が家は農家だったので、自給自足が、苦しいなかでも体験できた。非農家の苦労は創造を絶するものではなかったかと思っている。

昨今、スーパーなどの陳列棚には色々な製品が揃っていて、不自由と感じる人が少ないのではないでしょうか？　これも戦争のない平和な時代だということを忘れてはいけないと思う。

これを機会に、戦中、戦後の食料、物資など生活実態、体験談と物不足で生じる、みじめさを戦後派の方に伝えたい。国内ではみんなで先進者（軍事的）の言動を注意深く見守って、再び悲惨な戦争を引き起こさないようにし、併せて語り継ぐ集いに多く参加を呼び掛けていきたいと思っている。

『Ｂ２９による爆撃』

大村辰雄

ユーゴスラビアへのＮＡＴＯ軍の空爆が、連日テレビで報道されているが誠に悲しいことである。特にアルバニア人の国を追われた難民は、悲惨なもので日本の敗戦直後満州において民間人がソ連軍に追われ、死にものぐるいで逃避行を重ねたのに似ている。私の兄も昭和15年に満鉄に就職し、終戦と同時に抑留され、昭和30年に引き揚げてきたが当時のことは余り語りたくないと言っていた。

私は、その頃、中学３年生で南区にあった東亜合成の工場に動員されていた。昭和19年には日本の敗戦の色が濃くなり、Ｂ29が名古屋を初めて爆撃したのは確か12月13日であった。

その時は大曽根の三菱工場（飛行機のエンジンを造っていた）がやられ大打撃を受けた。その数日後、２回目の空襲がどういう訳か鳴海の上空で爆弾が落とされ、そのうちの数発が民家を直撃した。Ｂ29は十数機の編隊で必ず天気の良い日に来襲し、爆弾は全機が一度に落とした。その時の轟音は実にすさまじく今でも頭の中に鮮明に残っている。工場にいる時、警報が入ると我々は天白川の河口付近へ避難することにしていた。

爆弾が落とされた所は、避難場所から３㎞程しか離れていなかったので、自分の家も恐らく危ないと察し警報が解除されると同時に、工場へは戻らず一目散に扇川の堤防を家に向かって走った。大慶橋から名鉄電車の鉄橋近くまで来ると、堤防や田圃の中に直径10ｍくらいの大きな穴がアチコチにあいており驚いた。私の家は旧東海道筋で、その付近に数発爆弾が落とされたので負傷者でごった返していた。家にたどりついて中へ飛び込むと、裏口の井戸端で男の人が石の下敷きになって倒れていた。始めはてっきり親父だと思っていたが確かめてみると近所の警防団の人で、おそらく敵機来襲と叫びながら我が家の防空壕へ入るつもりでそこを通ったらしい。家から 100ｍ位離れた所に二発爆弾が民家に直撃し、そのどちらかから飛んできた石である。その時、亡くなった人の数は知らされていなかったが、かなりの死傷者がでた筈である。それでも落とされた爆弾の数からいくと田圃のほうが多かったのでまだ幸いであった。しかし、米軍は何処を狙って落としたのか今でも分からない。

昭和20年に入ると、次第に焼夷弾による夜の空襲が激しくなり殆ど毎晩空襲警報が入った。その度に、防空壕に入るのに、どうしても亡くなった人のそばを通らなければならないのでそれが一番嫌だった。敵機が日本へ侵入してくるのを知るには、当時はまだレーダーは無く聴音機という兵器（大きなラッパが幾つもついている）で爆音をキャッチし「東海軍管区情報」としてラジオで放送された。夜の灯火管制は絶対なもので、家から少しでも明かりが漏れることがあれば大変な事であった。敵機を迎え撃つには探照灯で飛行機を探しあて、それを高射砲で狙い打つのであるが、Ｂ29の飛行高度は大体１万ｍで、そこまでは弾が届かなかったようである。それでも１度だけＢ29が市内の小学校に撃墜されたことがあり、それをみんなで見に行った。機体はあまり壊れていなかったが搭乗員の死体が翼の上に引きずり出されていた。

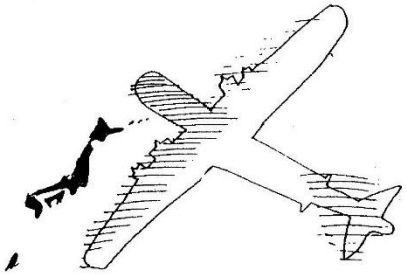
３月中旬には市街地のほとんどが焼きつくされ、焼け出された人達は親戚や知人の家に同居して、それぞれ大変不自由な生活を強いられた。防空壕は皆自分の家で作ったが、私の家

は裏の空き地に作り約６㎡の広さで深さ１ｍくらい穴を掘りどどめをして上に板を張り、なお土を30㎝位かぶせて爆風で飛ばされないようにしてあった。

夜寝る時は、警報が入ってもすぐ起きれるよう、昼間の服のままで余り着替えはしなかった。従って下着にシラミがわきそれを駆除するのに時々釜で湯を沸かし熱湯で処理していた。

５月に入り、夜の空襲は一層激しくなり名古屋城も14日に焼けた。その後、鳴海にもまた焼夷弾が落とされ、薪炭商をしていた我が家の倉庫も焼けた。この頃、夜間の空襲は照明弾が一面に落とされ真昼のような明るさのなかで、焼け残った家屋に目標を定め投下された。考えてみれば、戦争とは通常の理念は失われ勝利のためあらゆる手段を使って無差別に攻撃が続けられたのである。

私も今年古希を迎え、今世紀の移り変わりを大半見てきたが、今の平和な日本をつくづく有り難く思っている。しかし、時代の移り変わりと共に、いろいろ考え方も変わるので将来にわたって決して戦争の心配がないとは言えない。そのためにも我々戦争体験者は、時ある毎に多くの戦争を知らない人達に強くそれを伝えていかなければならない。



『敗　戦』

川　部　茂　子

私は75歳になります。人生75年も生きていると、そりゃいろいろなことがありましたが、一番強烈な出来事は敗戦でした。

当時、私は北朝鮮で生まれ育っていました。北海道や東北に似た気候の冬の長い、そして待たれる春の訪れで一ぺんに花の咲き誇る住み易い所でした。

朝鮮の方も儒教の教え通り年長者や上司を大切にして、謙虚な方が多かったものです。

咸鏡南道（県）の中心地の咸興という道庁の所在地でして人口幾十万で日本人の多い大都市でした。

私共の父は、岐阜の豪農の次男で農地の分散するを憂い巡査となりました。大正天皇の朝鮮行幸の折、側近の警官に選ばれて咸興の地で、交代となった折署長に乞われて現地の巡査になった由です。

母も岐阜出身で裁縫の教師をして縁あって結婚したのだそうで、大人になって何故父と結婚したかと尋ねたら「見知らぬ地に憧れた」そうです。

父は温厚な人で、余暇に尺八を吹き、母はミシンで私共の洋服を作り、兄や姉の学校の行事に連れて行ってくれました。植民地は他人同士でも皆仲良く助け合っていました。

平和な満ち足りた生活でしたが６歳の折父が病死し、子どもを連れて故郷に帰っても、士族の母は農業で生計を立てるすべを知らず、父の上司のすすめで刑務所の女看守となりました。家事一切は祖母が来て見てくれました。

父は広い地に家を建て農業でもする気だったらしく、生計の為、父の建てた家は借家とし、農地に母子の住まいを建てて生活していきました。昭和10年に、当時流行っていた結核で20歳の姉と、10歳の妹が逝きました。後には長兄と２歳上の姉がいて、兄は咸興から汽車で２時間程離れた元山の知人の商事会社に勤め、一家をかまえていました。姉は看護学校に入りました。一児を授かった兄でしたが、やはり結核で子どもが満１歳で亡くなり、兄自身も32歳で没しました。

姉は小学校の養護教師となり、私は日赤の看護学校に入り、昭和20年卒業し、そのまま京城日赤に勤務し、夏季休暇で帰宅し、８月の敗戦を親子三人で迎えたのです。

戦争の恐ろしさを知らぬ事で、父の墓もあり自家も借家も、多少の財もあるし、そのまま、日本人の多い咸興に残ろうと呑気なものでした。

ところが、８月15日を境として周囲は一変しました。日本人と見ると投石し、悪口雑言、外出も不可、室内にもソ連兵や、朝鮮の保安隊員が侵入し、めぼしい物、時計、衣類、装飾品等、思いのまま略奪し、娘や若妻を凌辱し、その為に気がふれたり自死する人も出ました。

北満にいた日本人が雪崩の様に帰国を目指し38度線で、戻って咸興に止まりました。また日本人の家屋は接収の名のもとに追い出され朝鮮人が住みました。

知人・友人を頼って、雑居生活が始まりました。南下した避難民の方々は神社やお寺に群がるように（朝鮮人は神社・仏閣は手をつけなかった）押し込まれました。

忘れ得ないのは８月初旬に、大勢の関東軍軍人と家族が汽車で帰国するのを駅で、婦人会が握り飯やお茶で慰労した事でした。なんとお人好しの私共だったでしょう。

帰国、帰国を相言葉に、売り喰いの筍生活でした。雑居生活ですから、台所は共同か、庭に石で窯を作り煮炊きしました。でも隣組が日本人会を作り、戸籍名簿を作り、少量ずつでも配給米や伝達事項を知らせてくれました。そのうち密集した生活に発疹チフスが流行りはじめました。高熱の続く病ゆえ体力のない者は次々と亡くなります。寺院の広場などに棺など無く、こもに包んであら縄にしばられた仏が積まれました。日本人会は動員して、万盤山の山中にクリークを掘り、担架で遺族と共に葬りました。クリークは三段位積まれて上に土をかぶせたそうです。

あまりの病人の多さに、ソ連兵と保安隊が人里離れた学校校舎を、発疹チフスの避病院と定めて従業員の医師・看護婦員と雑務と炊事係を日本人会に命じました。

私と姉は看護婦で働きました。陸軍病院の物品をそっくり持ってきて、上司は総てソ連人で物品の員数には口喧しかったものです。ベットも限られて日本人会で作った藁布団に毛布の粗末な寝所がほとんどでした。

秋から真冬そして遅い春が訪れる頃に、発疹チフスにより半数が亡くなり運と体力のある者が治りました。その間、日本人は漁船の底に潜み港から夜乗り南鮮の漁港につけてもらう、所謂闇舟で帰国するのです。法外な賃金を催促されたそうです。

多くの孤児と、家族のない脱走兵等の方々が退院しても行く処も無く途方にくれました。その時にも又日本人会が尽力して患者さんと従業員家族を団体として、帰国の途をひらいてくれました。咸興駅前に昭和21年６月10日集合。皆希望に燃えていても、持てる物を背負い手に荷物を持った異様な一団でした。有蓋貨車に詰めあって乗り、夜中発車しました。38度線で寸断されている線路まで走ってくれましたが、途中で止まる事度々で６時間かかればゆきつく筈ですが、２晩車中でした。なにしろ朝鮮人の機関士が、ソ連兵の指示通り動くのですから仕方ありません。終点まで来て一同降りました。山越えして38度線を突破するのです。夜半、隊を整え婦女子は男装して中の列、外側は男子です。40名近い孤児は熱血漢の青年３名が守って無言で歩きました。でも義侠心の青年が護っても、途中山中に転がってしまう幼い子もあり、マンドリン銃のソ連兵に見つけられ女の要求の時に、玄人の女性が進んで出てくれました。夜明けについに着いた38度線は巾が１㎞にわたって鉄条網が小川にそって張り巡ぐらされていましたが、皆素足で、無言で渡り切りました。そこは南朝鮮で、各々民家に米と若干の金で休ませてもらい泥のように眠り、銀飯のおにぎりをいただきました。また隊列を組み注文津に行き魚庫で一夜を明かし米軍のＬＳＴに乗り込み博多港に向かいました。ＬＳＴ艦中でも亡くなられた方があり儀式通り汽笛を吹きならして海中に葬りました。博多港に２日かかって着き、ＤＤＴを頭からかけられて、臨時の引き揚げ寮（大濠公園にあった）に入り各々帰国地の切符をもらい三々五々別れました。私共はいったん岐阜の父の家に行き、その後は、姉と二人で看護の道を進み母と一緒に暮らしました。知らぬ事は恐ろしい。戦争がいかに後々まで悲劇をうみ、無残な人生になるのかは、味わった者にしか解りません。

一昨年の８月に作家の五木寛之氏が北鮮からの引揚体験者でラジオの深夜放送で語っていました。思わず涙しました。あの困難のなか、大勢の孤児を引き連れてその後、博多の寺に収容されるまで、情熱を傾けて働かれた３人の青年の行動、また引き揚げ地で婦人を集めて「困ったことはありませんか」と妊娠させられた不遇の人達に優しく問いかけ相談に乗ってくださった婦人の友（羽仁もと子女史）の団体行動等々、立派な方々の厚い情熱を思う時、人間の偉大さを思います。そして戦争の愚かさを思います。二度としてはならぬ事です。

『　母　』

鬼　頭　清　花

母をこよなく美しいと、私は思い続けている。

明治33年（1,900 年）生まれの母なので、年齢を数えるのに、私は間違えることはない。今、存命なら99歳である。

生涯を和服で通した母は、いつも、手早く着物を身につけ、髪をまとめて寝間をでて行くのを、幼い私は、床の中から憧れの眼差しで眺めていた。

記憶は定かではないが、第２次大戦の前（日中戦争だったろうか）、出征兵士を見送ったり、傷痍軍人の慰いの海水浴が催されて、手伝いにでていった母たちは真っ白な割烹着の上に、国防婦人会と印されたタスキを掛け、甲斐甲斐しく接待していた。

その、凛とした姿を、とても美しく、眩しく見ていた。そうした、国防婦人会も第２次大戦に入り、戦況は厳しくなり、すべてが配給制度の物不足で、真っ白な割烹着はどうなったのであろうか。

昭和20年３月12日夜、空襲で自宅が焼失する。

私はその頃、２番目の姉と、母の実家の近くに住んでいる兄の家へ留守番に行っていた。この日、空襲を受けたが、焼夷弾は殆ど畑に落ち、被害はなかった。翌日は春の陽射しが暖かく、姉は工場へ行き、私は母の実家でのんびり遊んでいると、叔父が「お前の家の方が大変らしい」と伝えてくれたが、私は特別気にしてなかった。その時、畑の向こうに、母の姿が見えた。乱れた髪に頬は薄汚れ、父の古いマントを羽織って、足許は地下足袋の様なものを履いている。まるで地底から湧いた風体で、視線も定まってなく、日頃の身嗜みとは、まるで違っていて、私は家が焼けたのだと感じた。

この夜家では、父は徴用先へ夜勤なので、母と姉二人は、落ちてくる焼夷弾を、防火演習のように消火していたが、どんどん落ちる焼夷弾のなか、気がつくと娘たちも、近所の人たちも、いつの間にか姿を消し、路地奥に一人取り残されたという。

家に火はついてなかったが、周りは火の海で慌てて逃げようとしたが、炎で方向がはっきりしない。夢中でただ、路地から路地へ火を避けて、闇雲に走っていると、これも堂々巡りの様に、慌てふためいている娘たちと出会ったそうだ。

知らぬ間に、東へ走ったらしく、堤防にでて火からは逃れたがＢ29はまだ頭上を飛んでおり、落ちていた布団を、三人は頭から被り、飛行機と反対の方向に無意識に走っていたらしい。

後から家に行くと、北側の裏は焼け残り、南は堤防まで、三町内が全焼していた。母たちが、若し反対側を選んでいたら、全員焼死もあっただけに、奇跡だったと思える。

空襲警報が解除になり、夜が明けて戻ると、家は跡形もなく燃えていた。幸い従姉妹の家は無事なので、姉たちを残して、母は電車の通ってない、線路の上を歩いてきたのである。ぼんやりと、縁に腰を下ろしている母の横顔をみて、私は無性に家のあとを見たくなり翌日行ってみると、一面の焼け野原となって、馴染んだ街の面影はすべて消え去っていた。

姉たちと抱き合い無事を喜んだ。足許は残り火がまだ燻っていて熱かった。

戦後、母は父と４人の娘たちを、食べさせるために、買い出し、配給物資の分配への行列など、毎日動き回り、真っ黒に日焼けして、首筋などまるで、牛蒡のようになっていた印象が強く残っている。そんな母も、世相が落ち着いてきた頃には、首筋も白くなり、年齢それなりの美しさを取り戻していた。年頃の娘四人と一緒に歩いていると、五人姉妹と見えたのか、よく通りすがりの人が振り返っていた。

その頃が、母にとって、何よりの幸せな時代であったに違いない。

『私の終戦』

柴田鋭三

昭和20年８月、私は東部3769と隊（野戦銃砲兵第２大隊４中隊）に配属されていた。米軍の上陸予想地として、霞ケ浦に近い九十九里が浜では陣地構築が盛んに施行されつつあり、我が隊にも出動命令が下る。観測手が、先発隊、地上標定機（水平角、高低角、磁針方位角）が測定出来る機械で測量していた。

勿論、艦砲射撃や空爆に耐える、強固な要塞で、口径15センチの大砲の活動できる設計になっていた。

民家を借り受けて、嫌な不寝番や衛兵勤務のないつかの間、時間を過ごし兵隊であることを忘れる程だった。同行の指揮小隊長（彼は茨城県知事の息子）は情報を正確に把握していたらしく、広島への新型爆弾についても教えてくれた。彼も軍人らしからぬ一人であった。

突然中隊長が連隊本部へ招集。今日は天皇陛下の重大放送を聞くため、内務実施（軍隊では演習作業はしない）休日扱い、久しぶりの骨休み霞ケ浦上空での二葉機（アカトンボ）の訓練ぶりを眺めていた。突然アメリカ軍の戦闘機（ロッキード）が私たち目がけて急降下してきた。あわてて、付近の農家へ逃げ込む、と同時に大音響と共にススとほこりをかぶる。家の中は土煙となる。無意識の内に手で頭と顔をなぜていたのか皆顔がまっ黒であった。

後で解ったが、柱、鴨居などで弾痕が３カ所見つかった。誰も幸い怪我がなかったのが不思議でもあった。取り敢えず顔を洗う為湖へ出る。湖の中に白い物が二つ浮かんでいる。落下傘らしい、４人で小舟に乗り引き上げに行く。引き上げの時、日の丸の付いた飛行服を着用していたが２人とも貫通銃創、水を飲んだ形跡が無いので多分即死だろう。米軍の射撃の正確さに驚いた。

嫌な出来事のあと重大放送を聞くことになった。言葉の意味から鉾をおさめたと聞き戦争をやめた事が分かった。小隊長が開口一番もう兵隊は必要ない、喜べ故郷へ帰れるぞ、と言う。

昨日太平洋を眺めながら、海の彼方に敵機動部隊発見全員配置につけ、そんな事を考えていたのに、夢見る様だ。人生一生の内予測した、死から生へ転換された時の嬉しは、そう度々あるものではない。50年以上たった今もハッキリ追憶出来る。

その日霞ケ浦の夕日が綺麗で、ぼんやり眺め、何時も歌う軍歌がいつの間にか童謡に変わっていた。みんな童心に帰っていったのだろう。〈夕焼け小焼けの赤とんぼ～負われてみたのはいつの日か～〉嬉し涙があふれてきた。国破れても山河あり、見渡す限り、景色は今日も静かに暮れていく。

戦争は、国民に多くの苦難と、不幸を体験させてくれた。平和に慣れた現代、時の流れと共に風化しつつある戦争は私たちの時代だけでよい。

『学童疎開』

玉岡忠子

昭和19年、街には撃ちてしやまん、鬼畜米英、一億火の玉など、ポスターが方々に貼られて戦争一色であった。この年の８月早朝、私は名古屋市立古新国民学校の校庭に立っていた。

戦争から学童を守るために、校庭には学童疎開児と、その父母が集合していた。国民学校の１、２年生は団体生活が不可能なので、縁故疎開を、それができない児童は親許から通学になった。３年から６年生まで、縁故疎開が出来ない児童は、大都市周辺の市が指定する町村へ、学校単位で教師と共に避難生活をして教育の場となる。

第１団は月初めに出発し、岐阜県揖斐町の三カ寺、大和村に二カ寺で合宿生活をしていた。

この度は第２団である。男子はゲートルを巻き防空頭巾姿、女子はもんぺ、男女それぞれにリュックサックを背負っている。

出発の合図と共に、教師と児童が動きだした。不安げに先生頼みますよと、祈るように訴える親の視線が痛く感じていた。子どもたちは家族と離れたくない。泣きたい気持ちを押さえ、うつむきかげんに列から遅れまいと歩きだした。戦時下である、子どもでもめめしい振る舞いは許されなかった。

大曽根駅で中央線に、名古屋駅で東海道線に乗り換え大垣駅で下車した頃は、真夏の太陽が強烈に照っていた。ぐずぐずしている児童を追い立てるように揖斐電に乗せた。大理石の採掘で有名な赤坂駅を通過した頃、空襲警報のサイレンが鳴り響いた。心の不安を打ち消すように大声で騒いでいた車内は、一瞬に静かになってしまう。

疎開先を目前にして空襲とは驚きながら、神様どうか無事に早く、揖斐に着きますようにと一心に祈った。やがて、警報が解除になりほっとした気持ちであった。揖斐駅から、徒歩で本部のある長源寺に着き、男子をここで引き渡して、女子は新しく女子寮になる昭和寮に着く。昭和寮は元芸者の検番で、揖斐町の小さな川のほとりにあり落ち着いた、如何にも色町という感じであった。

日本家屋の二階建である。二階は舞台と大広間で、階下は幾部屋もあって、22歳の私に、もう一人先輩の女教師の部屋、本部を当寮に移し、教頭が常駐する部屋、食事、洗濯などをするため地元より採用した賄婦と寮母の部屋、食堂、台所である。

女子一人の持ち物は、上下の蒲団各１枚と、こうり一個の衣服と学用品である。それらを、舞台に作られた棚と、押し入れに整然と納める。夜は大広間に30余名全員の蒲団を並べ、二人一組で寝るのである。

朝は身支度を済ませ、清掃してから食事になる。中皿に南瓜のお粥があるのみ、昼は配給の大豆のうでたのが一皿、夜は固めの南瓜のご飯で、絶えず空腹に悩んだ。栄養補給のエデックという肝油だけではおいつかない。栄養失調になった私は、生理も止まり蚊に刺されたあとは化膿する始末である。下肢にその跡が今でも残っている。成長期にある子どもたちは、随分辛く空腹に耐え続けていたに違いない。

男子寮の大和村の下善明寺寮では、６年生を中心に畑を借りて野菜を栽培したり、山で薪を集めて豆腐屋へ行き、薪とおからを交換して、栄養補給にしていた。月１回の面会日をどれ程、親子ともども待ち兼ねていたことか、揖斐町での生活の唯一の楽しみだった。親は乏しい配給物資を、又、ヤミで手に入れた食べ物を子どもに与えていた。教師は月１回本校へ連絡のため、名古屋の家へ帰ることができた。

学童疎開で新しく入ってくると、荷物を調べ身体検査をし、しらみがいると、すぐ衣服を煮沸しなければならない。油断すると寮全体に拡がってしまう。冬に入寮した子にしらみがいて、夜衣服を外に吊るすと、固く凍って完全に死んだと思い安心していた。ところが陽が昇ると、氷が融けるにしたがって、衣服の間に赤いものがもぞもぞ動いている。しらみは寒さに強く煮沸しかないと知った。男子寮で数人が集って騒いでいるので、覗き込むと下敷きの上に、しらみをのせて運動会である。

空襲警報が発令されると、どんな夜中でも暗闇のなかを、子どもたちは素早く荷物の棚へ行き、もんぺをはき防空頭巾をかぶって整列する。それが５分もかからない。

岐阜市や、名古屋市の空襲では、焼夷弾が次々と花火のように落ちていく。名古屋のことを思うと痛みが走った。

３年生の高橋専一郎君は私が担任である。深夜、専ちゃんの母親が爆死したので、連れて帰るようにと連絡である。名古屋へ先生と行こうと誘い、外出着に着替えさせた。この時、専ちゃんはなぜ僕だけ帰るのか疑問を持っていたらしい。元気な子が一言も喋らず、黙々とついてきた。私はどう切り出したらと悩んでいた。名古屋駅で市電に乗り、今こそと思ったが、専ちゃんの顔を見ると言葉がでない。とうとう家の近くで、私は決心して事情を説明した。

夜半に空襲警報がでた。お父さんは戸締まりをして避難するからと、お母さんを先に徳川園へ逃がした。行く途中、爆弾や、焼夷弾がどんどん落とされて、多くの人たちが死んでしまい、そのうちの一人がお母さんだった。

専ちゃんは何も言わなかった。戸口にくると、女の人が出てきて「専ちゃん、ようきたね、お母さんが・・・・・・」、手を引っ張ってなかへ入れようとしたが、専ちゃんは戸にしがみついて離れなかった。昭和20年３月19日である。

その年の８月15日に、戦争は終結した。

「20年３月19日の名古屋空爆、１時45分警報発令、死者 826名、負傷者 2,728名、被害家屋 39,893 戸」

『幻の友』

中川　美智子

友とは、実在の人を指すことが多いが、私の友は、すでに他界していて心の友である。

昭和21年の早春、まだ新京（現在の中国長春）は、冷たく朝夕零下の中で震える毎日だったが、或る日、私のたった一人の友フミヨさんが亡くなった。仏さまのようにきれいな最後で、そのときのことが今でも鮮明に浮かんでくる。

その朝、私が食べようと野の草を流しで、洗っていたその泥水をフミヨさんは、奪うようにして飲んだ。目はうつろにドロンとして私が誰かも分からない。押し入れに戻る後ろ姿は宙をさ迷っているようで成すすべも無かった。腸チフスにかかっていたので、押し入れの中に寝かされていたフミヨさんは、その後すぐに『ナンミョウ　ホウレンゲキョウ』今にも消え入るような声が聞こえたかと思うと、次の瞬間、ドタンと音がした。それが最後だった。部屋にいた皆が急いで戸を開けてみると、胸で合掌し正座したまま横に倒れていた。安らかな顔で、きっと水を飲んで満足だったのであろう。わずか15歳でこの世を去った。もうすぐ暖かくなるのに、春になれば病気も快方に向かうと、信じていたのに悔しかった。医者もいない難民にとっては、自己治癒力以外に方法がなかった。

「生きて内地に帰ろうね。」と言い合いながら、戦後の混乱の中をここまで来たのに、とうとう力尽きてしまったフミヨさん、どんなにか残念だったろう。今尚、手を合わせて正座のまま横倒れになっている姿が、私をいつも守ってくれているかのように脳裏を離れない。そんな姿に話し掛けながら夜学に通い教員になった自分である。

このフミヨさんとの出会いは、老永府国民学校だった。そこは、ハルピンよりも北にある北安省鉄力の駅から、馬車で２時間程行った小さな日本人学校、そこの高等科２年生・７歳年上のお姉さんだった。戦争が激しくなった頃、この学校に転校してきた私は、フミヨさんの家と同じ集落の、伯父の家に養女とし内地から来たが、家が遠いので学校に寄宿して土曜日に家に帰る生活だった。誰も知らない土地で、特にフミヨさんだけが頼りだったことは言うまでもない。広い大地に赤々と大きな太陽が地平線に沈んで行く光景を眺めながら、二人でそれぞれの想いに浸った日々。土曜日の帰宅途中に、朝鮮集落の子どもたちによくいじめられたことや、子豚の大群をけしかけられて泣きながら必死に走ったこと。寄宿生活は朝食抜きの２食でいつも腹を空かしていた私たちは、裏の畑のにんじんを「ごめんね」と言いながら土を払って食べたことなど、フミヨさんとの思い出は、私の生活そのものだった。

このような大陸で、ある朝突然、馬のいななきとひずめの音で起こされた私たちに、恐れていた知らせが届き大騒ぎになった。

『日本が負けた。ただちに避難せよ。ゲリラの襲撃に会わないうちに簡単に荷物をまとめて駅に向かうように。』

本部からの伝令を受けるやいなや家の中を右往左往、自分たちの着替えと、食料を馬の背にくくりつけると、伯父は戸口にペけ印に板を打ち付けた。集落の人が揃って出発したのは、伝令が来てからわずかな時間だった。フミヨさんの家族は、１・３・５歳３人の男の子たちが馬車に乗りお母さんがたずなを引いていた。お父さんは戦争に行っているので本当に大変だ。子どもたちの世話でこれからの引き揚げ生活がどうなるのか。友だちとして出来ることをしたいが、伯母たちの側を離れると叱られるのでただ無言で歩き続けた。

いろいろな事件に遭遇しながら数ケ月後、ようやくたどり着いた先が新京の元兵舎だった。２ＤＫの長屋の１軒が集落みんなの家で、中は何もないが久し振りに手足を伸ばしてむしろをかぶって畳に寝ることができた。しかし、ここまで来るのにフミヨさんの弟２人が亡くなるなど数人が減ったが、これからの生活のことを考えると、悲しんでは居られなかった。自分で自分の食料を確保しなければならない。フミヨさんと畑の後を掘り返しては、小さい野菜の屑を見つけたり、食べられそうな野の草をとってきたりしてはみんなにあげた。鍋がないので缶詰缶を探し、石でかまどを造り何とか火を使って、温かい汁を数か月ぶりに味わうことが出来た。ほんの少しの物でも皆で分け合うことは、自然に誰にでも根付いていた。

12月の寒い夜、ちょっとした事件が起きた。学徒動員の若い兵隊が、発進チフスにかかり夢遊病の状態で部屋に入ってきた。額から血を流し、真っ青な顔で倒れるので皆で外へ押し出した。可哀想だがどうすることもできない。翌早朝、その人が豆腐屋の前で死んでいたとのこと。「お母さん」と一言声を出して倒れたと聞いたとき、なぜ怖がらずに介抱してあげられなかったのかと悔やまれた。その朝の豆腐は、いつもの白ではなく、紫色に変わっていたので売れないということで、久し振りに豆腐を食べたが、気持ちの良いものではなかった。

「この豆腐には、あの若い人の想いが入っているから、これを食べた人はきっと日本に帰れるよ。そしてこの人の分まで生きるんだよ。」

私とフミヨさんは、半信半疑で分け合って食べたが、とうとう私だけが日本に戻れた。

長い年月、この言葉が心の中を占領しては、苦しい時の励みとして仕事をやり通してきた今、私がしておくことは何だろうといつも考えている。ただただ“ありがとう”と感謝しながら、残された人生の過ごし方をこれからも模索していきたい。

『戦中の青春』

二階堂　美智代

昭和16年12月８日、太平洋戦争開戦となった。小学生６年の私は、女学校受験に明け暮れていた最中で、昭和17年３月、東京では空襲警報が発令されている。

高等女学校受験は、志望校でなく私学になったが、私にとって、人生での最初の挫折となる。「欲しがりません勝つまでは」こんな標語は、小学生の頃から見ていたが、太平洋戦争になると「鬼畜米英」、こんな標語も加わり、街での合言葉のようになっていた。私は日本が、大国の英米と戦争して勝てるだろうかと思っていた。

昭和18年になると、米不足になり、サツマイモを入れたふかしパンが出回りだす。学校へは防空頭巾に、もんぺという姿で通った。12月頃には、学徒動労報国隊が創られ、学校の教室で軍需品の仕事が開始される。

昭和19年には、学生まで毎日工場動務となり通った。日本の戦況が不利になり、空爆に対応して、６月頃から児童の集団疎開が強制されて、弟は犬山の寺へ疎開する。

昭和20年早々から、東京、名古屋、大阪などの大都市中心に昼夜を問わずの空襲は、都市機能、軍需産業に大きな被害を与えて、私たちの生活に影響が益々厳しく及んできた。伯父は東京で焼死、従兄弟は火を避けて川に飛び込むと、大勢の人が川にのがれていて、その中を沖に泳いで助かっている。空襲のなか、あの炎の熱さは忘れられないという。

母は、妹と弟を連れて、三重県に疎開し、父と私が残った。私はあちこちの工場を転々として、半田の会社の男子寮にいた。当時、最も必要な飛行機を制作しているのに、私たちの仕事は殆んどなかった。

７月と思っているが、空襲警報発令と同時に凄まじい音がする。爆弾だと思って夢中で、防空壕へ飛び込み、防空頭巾を手で押さえてしゃがんでいた。轟音が続き、愈々死ぬ日なのかと覚悟を決めたが、壕内は、沈黙したり、悲鳴で誰もが自分を失う有様であった。

空襲警報が解除になり、壕の外へ出ると、工場は炎に包まれて熱く右往左往していた。誰かが、みっちゃん、息してないよ、その声を後にして、燃え落ちてくる建物を避け道路まで夢中で走った。前後の事情も考えず、家に帰りたいと思った。この空襲で、父が無事であってほしいと祈りながら、溢れる涙を拭い、西も東も分からないまま歩きだした。

その時、トラックが止まって、軍服に略章を一杯つけ、長靴に軍刀を下げた将校が下りてきた。どこへ行くのか、尋ねられる。開き直るしかない、学徒動労報国隊として動員されているが、この空襲で工場が焼け、家に帰ると答えた。非国民と怒鳴りつけられると思ったが、そうではなかった。行先を鶴舞公園と告げると、そちらへ行くからと同乗させてくれる。

戦後に気付いたが、鶴舞公園には高射砲があったので、その弾丸を輸送するトラックではなかったのか。無事に帰宅できたのは、親切な将校のおかげと感謝している。

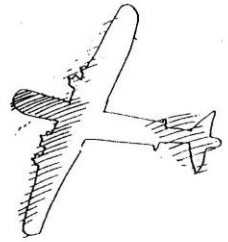
名古屋大空襲の前、４月には沖縄本島にアメリカ軍が上陸し、南部戦線では、女子学生で編成された、ひめゆり部隊が集団自決の報が伝えられる。私たちと同年代の女子学生の悲報は、戦争のための犠牲と言うにはあまりにもむごいことであった。８月に広島、長崎と相次ぎ、原爆投下され、15日に敗戦となる。

時の東條首相は、空襲により、軍需工場から逃げた、14歳から25歳の未婚の女性に「婦道に恥じよ」と、言明したが、この言葉、彼に返上したい。

戦後、初の映画「そよ風」が上映された。映画の主題歌「リンゴ」の唄は、全国に流れ暗い世相のなかで空前の大ヒットになり、現在も、同世代の人たちによって歌い継がれている。まさに時代を反映した唄であった。

11月に、新日本婦人同盟が、亡き市川房枝により結成された。選挙法改正により婦人参政権が、占領軍によって与えられたが、結果として与えられた現実が、その後の婦人運動を長く低迷させる原因になってしまう。

女性にも、大学、専門学校が開放されて、男女共学が認められ、女性の高学歴層の実現となったのである。



『戦争体験記録』

林　敏之

私達が育った時代には「徴兵検査」という制度があった。男子が20歳に達すると必ずこの検査を受けなければならなかった。

この検査では、身長・体重・胸囲・視力・聴力などの検査が主であった。これ等を総合的に判定して、甲・乙・丙などの等級がつけられた。「甲種合格」の判定を受けようものなら、隣近所の人々から称賛の眼で見られたものだった。

私は近視眼であったために「第一乙種合格」であったが、いつ入隊通知が来るかも知れなかった。

現在の自衛隊は、陸上自衛隊・海上自衛隊・航空自衛隊の三種の部隊があるが、私達の時代は陸軍と海軍の二種であった。航空隊は、陸軍航空隊・海軍航空隊と呼ばれて、それぞれ陸軍と海軍に所属していた。陸海軍への入隊の確率は圧倒的に陸軍の方が多かった。

私の実家は名古屋港に近かったので、毎日のように海を眺めたり、汽船を眺めたり、時には軍艦を眺めることもできた。こうしたことから、どのちみ軍隊へ入いらなければならないのなら、陸軍へ入隊するよりは海軍を志願すればよいと考えた。

時あたかも、短期間で海軍下士官を養成する目的で「海軍特別幹部練習生」という制度が新設された。これ幸いとばかりに受験した。身体検査と学科試験とに合格し、第３期生として昭和20年５月15日に、大竹海兵団に入隊した。階級は水兵長であった。ちなみにこの階級は、最下級から順に二等水兵・一等水兵・上等水兵・水兵長・下士官・尉官・佐官・将官となっていた。なお、第１期生に作家の城山三郎氏がおられた。

大竹海兵団では、一カ月半の間、海軍軍人としての基礎を徹底的に叩き込まれた。私達を指導される教班長（下士官）が、常に言われたことは「スマートで、目先きが利いて、几帳面、負けじ魂、これぞ船乗り」という短歌調の言葉であった。もう一つよく言われた言葉は「五分前の精神」という言葉であった。

これは作業や仕事をする場合には、五分前に準備万端を整えて待機し「かかれ」の号令（海軍用語であって〔仕事始め〕の意である）で、直ちに作業に取りかかることが出来る態勢をとることである。

この二つの教えが、その後、現在に至るまで、私の人生に大いに役立っている。

昭和16年12月８日に太平洋戦争に突入した。緒戦のころは連戦連勝、戦えば必ず勝つという勢いであった。しかし、翌17年６月５日のミッドウェー海戦で、我が航空母艦が四隻も撃沈されるに及んで、形勢は逆転し、連戦連敗に追い込まれることになった。

昭和20年になると、名古屋へも連日連夜、アメリカ空軍の大型爆撃機Ｂ29の空襲が行われるようになった。その爆撃を避けるために、灯火管制といって電球の笠のまわりを風呂敷などで覆って、室内の灯火が家の外にもれないようにしていた。現在のように、目映いばかりのネオンサインが街中に光り輝いていることと考え合わせると、実に雲泥の差である。Ｂ29の爆撃技術は、実に的確であり爆弾に交えて焼夷弾も投下されたので、市内は焼け野が原と化した。我が家も私が海軍に入隊する前夜に焼失してしまった。

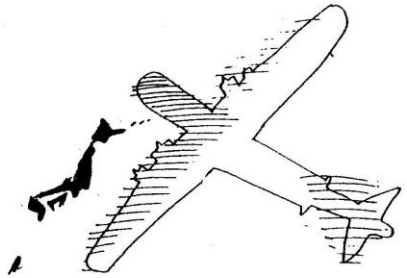
その頃は、生活の三大要素である衣食住のうち、衣と食は既に配給制度になっていて、金はあっても自由に購入することが出来ず、配給切符を持参しなければ買うことができなかった。そして住の方は先述したように全市焼け野が原である。当時外出する際には男子はゲートルをすねに巻き、女子は「もんぺ」をはかなければならなかった。なお頭部を守るために防空頭巾を携帯しなければならなかった。

大竹海兵団での新兵教育を終えて、本来の任務である暗号術の教育を受けるために、山口県の山口経済専門学校（現在の山口大学）の一部を借り受けて、暗号教育を受けた。

暗号は文章の語句を全て四桁の数字に置き換え、更にその数字を一定の法則に従って加減乗除するのである。暗号を受信した側は、その暗号数字を、発信した側の逆に除乗減加して、元の文章にするのである。数字が不得手であった私は、人一倍の苦労をしたものだ。８月14日の夜、暗号電報を受信した。解読すると「翌15日の正午に総員は拡声器前に集合せよ」との内容である。

８月15日の正午、天皇陛下の玉音放送があって、日本が戦争に負けたことを知ったのである。

終り



『米軍５８機動部隊来襲』

平野　善次郎

私は今年71歳です。昭和17年６月、旧中学３年生の時、学徒出陣で満16歳で当時の少年の憧れの的、七つボタンの予科練に志願兵として出征しました。戦争とはどういうものか、全然わからずに従事しました。昭和20年、18歳の夏に復員して今日まで生きのびました。

当時は日本中、米軍飛行機による無差別爆撃で大変でした。戦後の昭和23年に名古屋に居を定めました。その頃まだ、旧市街地は殆ど焼野原でした。

今、ヨーロッパで戦争がおきて、一般市民も死んでいます。戦争になれば無差別です。良くわかってください。私も当時18歳の子どもでした。怖かったです。死んだ人を今でも思い出して泣いています。その恐ろしい初体験の頃、日本列島太平洋岸を米軍58機動部隊が北上しておりました。

兵舎外の上空に、普段と違う大きな爆音にうつらうつらしながら、体を動かし毛布にくるまっていた。「総員起こし５分前」と当直兵の呼称で目を覚ました。しかし、ものの２～３分と経たずに「敵襲、各個に退避せよ」とけたたましい号令に変った。各自、白色の下着のままカーキ色の第３種軍装上下を手に持ち兵舎外に飛び出た。その瞬間、上空を見たら案の定、米58機動部隊から発進した艦載機らしきものが１機２機３機と縦列を作り三沢飛行場の上空を過ぎて鮮やかに反転、急降下し、不燃ガスの黒煙を機体後部から噴出し機関砲弾を発射し、高度50ｍくらいで我々の仮設兵舎の上空に飛来し、地上20ｍくらい天空に、幹を突き上げ植わっている松林の松をゆさぶり、大地に轟音をぶっつけて先づ１機飛び去った。

我々はバラバラ夢中で逃げた。次いで二番機だろうか、機関砲の地上掃射を我々目がけてあびせてきた。プスプスと土煙りを上げだして、バラバラと空薬挟を落下させてきたのを目撃して、誰の命令でもなく身を伏せ、無数に自生している柏の灌木の中へ、ほふく前進してかくれた。３番機、４番機とたて続けにバリバリと地上掃射して飛び去った。別の方でも同じことが起きているのか、早朝でもあったが急にあたりが静かになった。聞こえるのはすざましいばかりの飛行機の爆音と、投下した爆弾のさく裂音と20ミリ機関砲の地上掃射の音ばかりであった。

私は、第14期甲種飛行予科練習生で位階は兵長、年は18歳であった。初めての体験であり、胴振るいして生きた心地は無かった。無抵抗のまま大きな葉の柏の細い幹にしがみつき、ただ暴風雨の過ぎ去るのを待った。第１波の来襲が終わった後、はるか海上には渡り鳥が群れ飛ぶかのように米艦載機が望見できた。それは敗戦の年の６月、雨模様の日のことだった。若き日の強烈な印象が今もなお記憶の底にあり、時折夢に見るのである。

平成１１年４月

当時の日記より引用する。

『思い出すままの誌』

昭和19年４月～22年４月

藤島　繁博

今年も４月初旬、名古屋市立平子小学校東門脇の桜が満開の折、暫し拝見させてもらいました。ここ数年、欠かさずこの時期、この場所に立つことが習慣となりました。

〈昭和19年４月〉

真新しい鳴海国民学校東分教場へ入学した年から55年の歳月が過ぎました。

校舎は南向、木造１棟と渡り廊下伝いで東側に小規模のやはり木造の建物がありました。

校舎がとても広かったことが記憶に残っております。現在の東門近くに桜の若木が何本か植えられていたでしょうか。12月７日の東南海大地震と翌年１月13日の三河大地震を挟んで、名古屋市内が本格的空襲を受けるようになり短期間縁故疎開をすることになりました。

出発の日、車窓から見た名古屋城が６月初旬帰途の際には周り一面焼野が原と化し、その勇姿を見つけることは出来ませんでした。

その後も、空襲は怯むことはなく続き防空壕での生活が当たり前となってきました。名古屋市内を空襲した爆撃機は、帰路の重量を軽減させるためか鳴海町内には余った爆弾・焼夷弾を点々と投下しました。

先年新設された、名古屋市有松都市整備事務所の東側に投下された一発の爆弾は大きな恐怖でした。落下してくる時の不気味な音、炸裂音は脳裏に焼き付いております。スイッチが一瞬早く入っておれば直撃を受けたかも知れません。名古屋市内の重要な軍需工場を目標にしたＢ29の編隊による空襲は連日のようにあり、学校へ着くやその足で帰ることも度々ありました。

破裂した爆弾の破片を拾い集めにバケツを持参したり、蓖麻（ひま）の種を通学路に播き実を採ることも手伝いました。兵器を作ったり、油不足を補うための苦し紛れの策でした。しかし、その必要はなくなりました。長い長い戦争がやっと終わったからです。

〈昭和20年８月15日　太平洋戦争、第２次世界大戦終結〉

２年生１学期の授業はほんの僅かしかありませんでした。２学期に入って教科書の墨塗りが始まりました。戦争が終わったので文章や絵の中で、不都合の部分は消すことになったのです。

空襲から開放されたものの食料不足は日増しに深刻となり、配給の米はいつも米櫃の底が見え、そのうえ穀象虫の発生を日向で退治したり、小麦を石臼で挽くことが日課となりました。すいとんは上等で、普段は殻もそのまま使った黒い団子汁の代用食が続きました。

通学には草鞋だったのですぐ破れて履けなくなってしまいます。薄っぺらになった下駄のの上に草鞋をのせ釘で打ちつけ長持ちさせる知恵が生まれました。手拭いは毎日持参しなければなりませんでしたが、鼻緒が切れた時には裂いて応急手当てをしたものです。

手越川には不発の焼夷弾が幾つか残っており、赤い釦（ボタン）は絶対に触ってはいけないと言われておりました。もし興味をもって触っておればまず大怪我をしたことでしょう。

〈昭和21年４月〉

３年生となる。分教場の最上級になったことでちょっといい気分になりました。すでに流行り出した野球に熱中しながら、自転車乗りの練習に励んだのもこの頃だったでしょう。子ども用はありませんから大人用自転車の「三角乗り」でした。

運動場の西半分を使ってサツマイモ作りは、楽しい思い出として今でも忘れることができません。各自、家から鍬を持ち寄り何日かかけて土を耕し畑にしました。イモ苗を植え秋の収穫を待ちました。

あの時の味は格別で、今探しても見つけ出すことが出来なくなってしまいました。戦後一気に普及した丸型種の「護国イモ」を隣組が開墾した畑で掘り出すことができました。

〈昭和21年11月３日　日本国憲法公布　翌年５月３日施行〉

終戦２回目の冬も寒く、ひびと霜焼けに悩まされつつ２学期も終り近くになりました。

〈昭和21年12月21日　南海大地震〉

３年連続の地震を体験したことになりますが、爆弾のほうがそれ以上に恐ろしいと思いました。

〈昭和22年４月１日　学校教育法施行　六三制の新学制実施　小学校が復活〉

鳴海小学校４年生。１学級60名前後。各学年６クラスの正にマンモス校で、「新しい教科書」による勉強が始まりました。

分教場の記録は「昭和18年12月２日開場した」ほかは残念ながら見つかりません。

平子小学校独立までの９年４カ月、更には細根にあった縁続きの鳴海尋常高等小学校東分教場まで溯れば戦前・戦中・戦後そして現在までの地域の歴史が一本の糸で繋がるのではないでしょうか。

原体験を辿り忘れかけた記憶を拙文で綴ってみました。本記録集をお読みいただいた方で詳しい状況をご存知でしたら、是非とも次号で紹介いただきたいと思います。2003年の五十周年、そして百周年の時、否、永遠に校庭の桜が真の「泰平のシンボル」であり続けてほしいと祈っております。

『子どもの遊びと物作りの楽しさ』

舟岡邦雄

『今度の戦いは、必ず勝つ』、絶対に負けない、負けてはならないと言う事を、日夜、学校や家庭で教えられ、子どもごころに当然のようにこれを信じ切り、まさに戦争づけの毎日だった。この戦争が、たとえ、生き残りを掛けた最後の戦いになったとしても、その時は、必ず『神風が吹いて勝利に導いてくれる』、だれ彼となく言い伝えられ、それを信じて止まなかった。今では到底信じ難い事だが、当時としては本当の話であった。

毎日、ラジオから流れる戦果は常に味方有利の情報ばかりで、敵の本土接近状況や、毎日の空襲警報発令、そしてＢ29の襲来回数が増えつつある中で、日増しに戦況不利な状況となり、負けるかもしれないと言う不安感と恐怖の毎日だった。そして、近隣の町がＢ29の空襲に遇い焼け野原になり、益々戦況は不利となる中、昭和20年８月15日の正午より天皇陛下の玉音放送を聞き、決定的な瞬間を迎えたのである。その日は、自分でも知らぬ間に、戦争が終わった事を近所にふれまわっていた自分を、理由は分からないが、何故か鮮明に覚えている。それは、今考えて見るとこれまで校庭で毎日目にしていた兵士の厳しい教練を思い起こし、負けた時は、立場が逆転すると言う不安感を、子どもこころに本能的にとっさに感じ取ったのかも知れない。

戦時中は、国民全体がお国のために一致協力して食料増産に励み、子どもたちも一生懸命親たちの手伝いをしたものである。昔の生活を知らない人たちにはなかなか想像できないかも知れないが・・・・・・。そのほとんどのものが自然を相手にした思い出深い物ばかりで、こんな事が遊びかと思われるかも知れないが、それを挙げて見ると次の通りである。

１）魚取り（網や仕掛け／竹で編んだもの、ガラスの容器）や、釣り
２）川で泳ぐ（夏、近くのにら川で競いあって、木や橋の欄干から飛び込む）
３）ホタル取り（梅雨時、近くの小川で）
４）鬼ごっこ
５）木登り（裏山の雑木林が遊び場）
６）木の実取り（栗、ドングリ）
７）筍、やまいも取り
８）蜂の子、イナゴ取り（毎年たんぼのあぜみちで）
９）カブト虫、クワガタ取り（夏、梅雨時から、くぬぎ、柳などの木から）

などである。

また、日本がまだ常勝ムードいっぱいの『勝ち戦』に酔い知れていた頃の懐かしい思い出のある遊びとしては、

１）ビー玉
２）メンコ
３）竹馬（自分で作って乗る）
４）竹トンボ（自分で作って飛ばす）
５）水鉄砲、紙鉄砲、杉の実鉄砲
６）石蹴り、缶蹴り
７）コマ（木製のもの／購入、ドングリ／手製）

8）クギ刺し
9）馬乗り
10）凧上げ（自分で作る）
11）草笛（春先にでる雑草で作って吹く）
12）あぶり出し
13）紙飛行機
14）縄飛び、ゴム飛び
15）お手玉
16）おはじき

などがあげられる。どれもこれも楽しい思い出あるものばかりで特記できないが、特に印象に残っているものは『メンコ』と『ビー玉』である。学校から帰るとすぐにカバンを放り出し、数人の仲間と日の暮れるまで遊んでいて、夕食にはなんとか間に合ったものの、親たちにはよく叱られた事を思い出します。

この頃の遊び道具について考えてみると、自分で買った記憶がなく、家にあったものとか兄から譲り受けたもの、そして何と言っても自然の素材を利用して自ら作ったものばかりであった。最近、特に環境問題が深刻化し合理性や便利さだけが最優先され、スピードアップされた現在の生活があればこそ、この肌に優しい、自然のぬくもりも、より新鮮に、懐かしさを覚える。

そして、戦後になると外国の文化が入り込み、遊びの様相は一変し、これまでの日本古来の遊びは影を潜め、スポーツにとって変ってしまった。

我々が真っ先に飛び付いたのは『野球』であった。これをやって見て『何と楽しい遊びか』と、すぐにのめり込んでしまい、仲間を誘って、近くの空き地や広い屋敷の庭を借りて、よく遊んだものである。広い庭と言っても所詮は庭、ボール遊びには狭すぎ、窓ガラスを割ったり、障子紙を破いたりしてよく叱られたものだ。

当時は、まだ復興前で、てごろな空き地が沢山あり遊ぶ事には事欠かなかった。この野球を通じてスポーツの楽しさを知ってからは、『遊びの意識、感覚』が変った様な気がする。

しかし、戦後の物不足は深刻で、野球用具も最初の頃はすべて手作りの物ばかりであった。

手作り品の素材はつぎの通りである。

1）バット・・・・・・・・・竹や木
2）グラブ＆ミット・・・・布
3）ボール・・・・・・・・・スポンジボール、軟式テニスボール
4）キャッチャーマスク・・無し
5）ベース・・・・・・・・・手書きｏｒゴム板

まったくの遊び感覚で、仲間が４、５人集まればすぐに野球ゲームをして遊んだものである。次第に物資不足から解消され、用具も出回り始めはしたものの高嶺の花、なかなか買えず、親戚や知り合いから中古品を分けて貰ったり、安物を買って貰い、皮用の油を塗り、こまめに手入れをし、はれ物を扱う様に丁寧に扱ったものである。

最近では、物が有り余る程豊富に出回り、その便利さの中にどっぷりと漬かってしまい、その便利さ故に、物に頼りきってしまい『考える事』をせず、物造りの楽しさや遊び心を失い、自然との触れ合いが、知らず知らずのうちに少なくなっていのくは寂しい限りである。

『戦争中の思い出』

古沢　貢

戦時中の体験を語る時、私は今でも胸が痛む。わずか16・17歳の若さで少年飛行兵に志願し、南の島に散っていった学友のことや、近所のオジサンが一銭五厘の赤紙１枚でかりだされ南方や中国で帰らぬ人となってしまった。マスコミは決して真相を報道することはなかった。すべて終戦で明らかになったのである。

私は、旧制中学の１年に入学したが間もなく学徒動員として働かされる運命にあった。一般の女子は挺身隊として、すべての者が兵器産業（軍需工場）に従事し、みんな真っ黒になって煤煙の中で働いた。父は徴用工として太刀洗飛行場で働いていた。

中学校に入ったばかりの私にはとても辛かった。何とか働かない方法はないものかと悪友の所で相談し、中学２年の春、官立の熊本無線電信講習所に受験した。あのいやな煤煙の中で働かないでよいのなら何処でもよかった。幸い簡単な口頭試問だけでパスすることが出来た。学校は熊本の水前寺公園の近くだった。その学校は食事付きで給与は、海軍の待遇だった。すべてが海軍の士官の命令だった。将来は魚雷をつんだ潜水艦に乗る運命にあった。食べ物は粟、稗、高粱など代用食ばかりで腹の足しにはならなかったが黙って食べた。一度でいいから銀シャリが食いたいといつも思っていた。

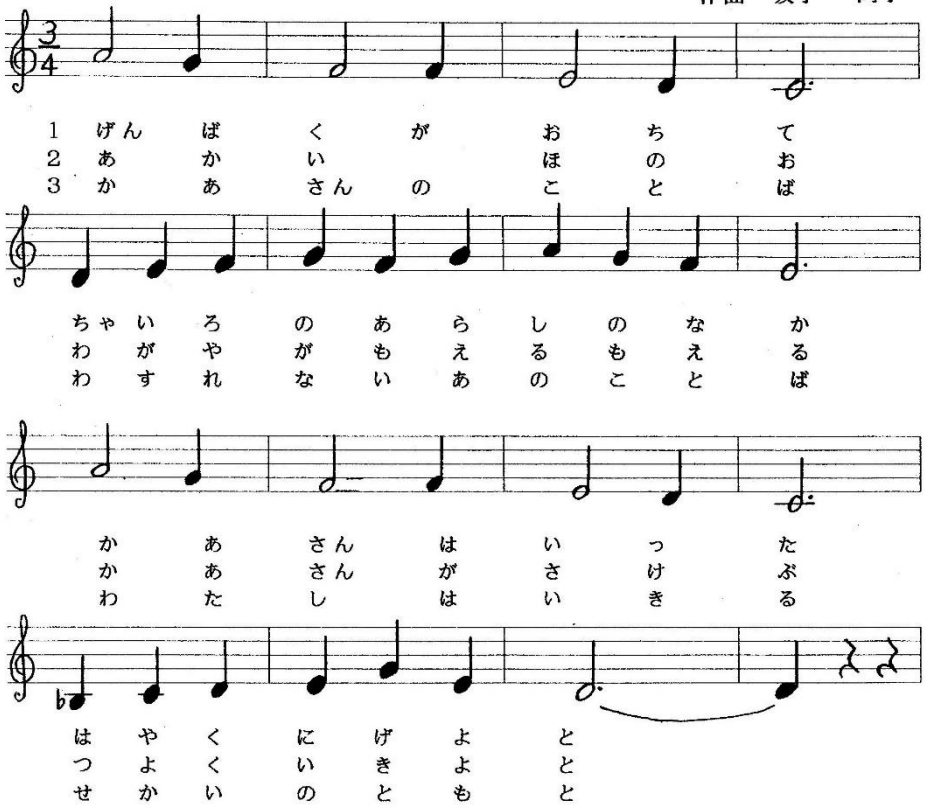
官舎は蚤やシラミの巣だった。体じゅう食われて大変難儀した。半年ばかり経つとホームシックにかかって家が恋しくなった。「帰りたい」と思った。母に手紙を書いた。母は手紙の返事と一緒に団子やお菓子を送ってくれた。うれしかった。泣きながら便所の中でこっそり食べた。２年で卒業だったがその半年前、敗戦になり家に帰ってきた。帰ってみると一面焼野ケ原となっていた。私の家と隣の家だけが不思議なことに残っていた。

夜寝る時は電気を消し、いつでも逃げられる準備をして寝た。空襲の度に、防空壕の中で頭巾をかぶり、グラマン戦闘機やＢ29爆撃機の爆音が通り過ぎるのを祈るような気持ちで身をひそめた。

あの頃、私が考えていたことは『早く戦争が終わってくれないかなあ』ということだった。

戦争体験の歌
《ごめんなさいお母さん》

作詞「戦争体験を語り継ぐ集い」実行委員会
作曲　坂手　尚子

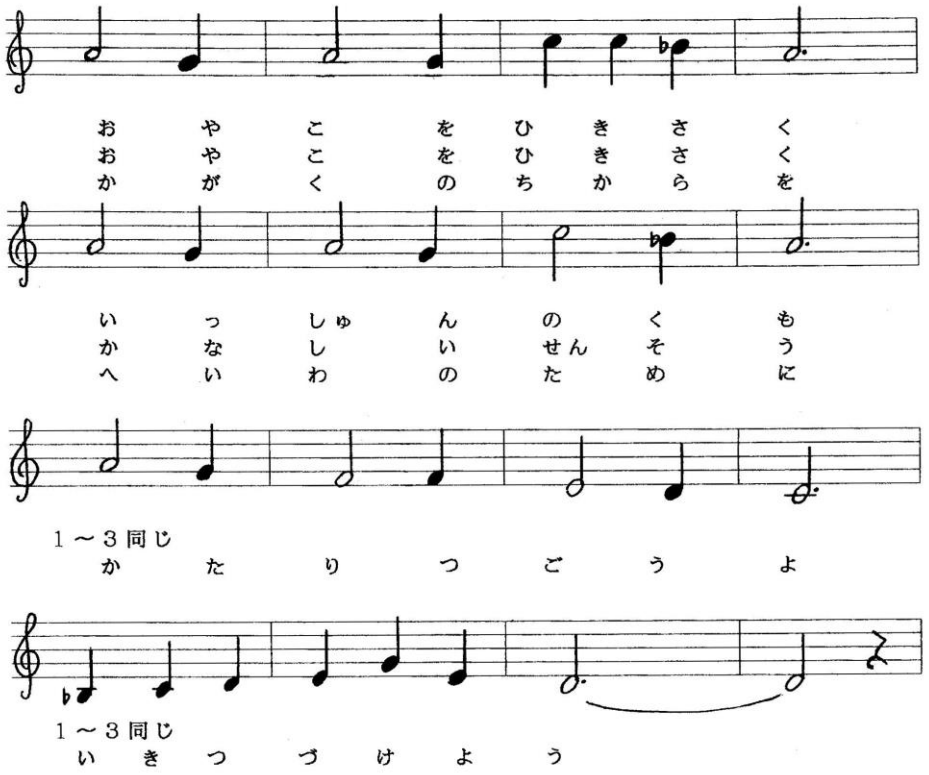


二

赤い炎
我が家が燃える燃える
母さんが叫ぶ
強く生きよと
親子を引き裂く
悲しい戦争
語り継ごうよ
生き続けよう

三

母さんの言葉
忘れないあの言葉
私は生きる
世界の友と
科学の力を
平和のために
語り継ごうよ
生き続けよう



《ごめんなさい　お母さん》

子どもたちと歌いたいうた・歌詞

一

原爆が落ちて
茶色の嵐の中
母さんは言った
早く逃げよと
親子を引き裂く
一瞬の雲
語り継ごうよ
生き続けよう

編　集　後　記

第六集も多くの方々に投稿いただき、無事に編集を終えることができました。毎年筆をもたれる方や、新しく原稿を寄せていただいた方、皆様に厚くお礼申し上げます。

平和な暮らしの中では自由に筆を取り、思いの丈を後世にまで残る記録文として書き上げることができます。いざ、平穏が破られると私たちは言葉さえ不用意には出せなくなります。相手を警戒し、常に疑いの気持ちと、不安を胸にコミュニケーションを取ることになります。

世の中は「共生の時代」に向かっています。お互いの信頼と助け合いの上に築く社会をめざし、努めて平和を守っていく姿勢が求められるのではないでしょうか。

過去の痛みを少しでも伝え、平和の歩みのためにこの記録集が綴られていくことを大切に思います。

緑区民の戦時体験記録集（第六集）

編　　集　「第１１回戦争体験を語り継ぐ集い」実行委員会
発行・印刷　名古屋市緑生涯学習センター
発行部数　１５０部
発行年月日　平成１１年７月１０日

ごみ減量チャレンジ100
市民1人1日100gのごみ減量

◎この冊子は、再生紙（古紙配合率 100%、白色度70%）を使用しています。